

## 〈言葉と人間としてのいのちの根〉

3年E組担任 榎村 光世

3年間この学年の生徒と共に同和問題学習に取り組んできた。この学年の生徒が1年生の時、私は「詩集 部落 5本目の指」を読む機会を得た。そのときその中の『楚歌』を何度も何度も繰り返し読んで。『楚歌』の中の一言が私をとらえて離さなかった。

私はみじろぎもしない（できないのだ）

痛みの正体をみきわめないまま

どうしてこの瞳を閉じられようか

怒りを抱き、カッと眼をみひらいて仁王立ちになっている姿をイメージさせるこの3行が、私をここまで支えてきたものの一部であるように思う。

言葉には力がある。それは眼に見えない力だ。人を励まし、傷つけることもある力。生徒たちはその力を恐れ、頼りにし、また自分の血肉としていくのである。言葉の中にはその人間の心や意志が込められている。そして生徒たちは自分たちが発表することが差別解消に向けて自分たちのできる「行動」のひとつだと考えている。友の言葉を、自分の言葉をどのように自分の力としているか、そして、どのように自分を変えていったか。次のような思いを生徒たちは書き留めている。

※

私にとって1番大事な学習が終わった。3年間いろいろな思いを体育館でうちあけてきた全体学習が、今日の授業で幕を閉じた。けれども私は差別に対して怒りを持ち続けている。先生に3年間の全体学習は今日が最後かもしれないといわれたとき、私は悲しかった。私にとってみんなの発表した一言一言が私の心の支えになっていたからだ。

（3年最後の全体学習の後の生徒感想）

※

僕にとってこの全体学習が一番良かったと思う。学習会の部落問題学習で自分の本音を吐き出してから僕の革命が始まった。人間としてこの問題は避けて通れない問題である。全体学習の前日の授業でも一生懸命発表したし、全体学習でもはじめてに等しい発表ができた。これまで発表はしなかったが、心の中ではいろいろ思っていた。これをみんなに言うことが大切だとわかった。

（3E全体学習の後の生徒感想）

※

僕は手をあげて発表できなかった。そのとき僕は情けないなあと思う。みんなの気持ちに答えられなかった。けど僕は発表できないけど絶対に逃げたくない。そして一日も早く差別がなくなるようにしたい。

（3E全体学習の後の生徒感想）

※

私はこの全体学習を通して“友だち”だった子が“親友”になったような気がする。同和問題学習は私を支えてくれた。私は母に部落差別のことをずっと言い出せなかった。しかしある日の同和問題学習の時のみんなの意見に勇気づけられて私は母に部落差別のことを言い出すことができた。はじめて母が差別者だということに気づいたのがこのときだった。ものすごくつらくて、はがいくて、不安だった。何回かの同和問題学習で私は自分に自信をもちはじめた。もう一度母と話し合わなくてはならないと思った。3Eの全体学習の前日に、私は母と話し合った。次の日も話し合い、また次の日も、私は母と話し合いを重ねた。母は差別者ではなくなった。それまではとても苦しかった。でもそれ以上にとてもうれしかった。この3年間、私は成長したと思う。私は差別になんか負けない。

(今年度最後の全体学習の後の生徒感想)

友の発言を聞き、受け止めることによって、またそれを自分のものにすることによって、そして自分が手をあげて発表することによって、生徒たちは変わっていく。大きくたくましくなっていく。差別解消に向けて、雰囲気や飲まれて流されていくのではなく、自分の足で歩もうとしている。それは単なるうわっただけの言葉によるのではなく、全体学習の中で見られるような言葉の中に含まれている力、その人間の持つ真実の思いや意志がその原動力となっているのだと思う。同じ言葉でも人によって受け取られ方が違うのはその言葉の中にある重みが人によって異なるのだと私は思う。全体学習での“発表”について、発表することだけに意義を見だし、発表がなかなかできないものを責めるかのような全体学習での雰囲気に戸惑っていた私が、言葉の力を肌で感じたのが3Eでの全体学習前日の授業と当日の全体学習であった。

※

私はうれしかった。3年間やり続けてきた意味。そしてこれからも差別がある限りやっていかなければならない意味がわかってきた。私はひとりになって考えてみた。みんな思っていることはある。手をあげて発表できない子にしたって、何らかのことを思っていると思う。自分の中で戦っているに違いない。私は発表したからって発表できない子を責める権利はないと思う。ただ自分が発表しないと、自分もわからないし誰もわからないっていうことだ。

(3E全体学習の後の生徒感想)

※

思っていることは同じなんだけど、いろんな表現方法があるんだなあと思いました。字や絵が下手でも伝える言葉がたどたどしくても決して恥ずかしがることはない。気持ちや思いが伝わるのが大切なんだと思います。

(解放文化展の3E出展作品：授業記録をみての生徒感想)

全体学習は生徒たちにとって“発表”から“心の絆”へとつながっていくものであったのではないだろうか。そして単なる言葉によってでは得られないものをつかみ、力を得た学習であったのだと思う。力のある言葉を自分が言えるということは「先生にほめられたいから。」「いいように見られるように。」という見せかけからの、差別からの解放であるように思えるのだ。そし

て自分を解放していくことだと思う。

言葉が終わったところから真の行動がはじまると言われている。行動するということを通して自分の言葉に力に満ちた思いが追加される。この生徒たちは自分の意志で手をあげ、自分の足でしっかり立ち、きれいごとでない本当の思い、本音を発表するという「行動」によって人間としての命の根を深くし、言葉にも深みを帯びさせていったのではないだろうか。また、力溢れる言葉をしっかり受け止め、自分のものとしていくことによってさらに人間としての命の根を広く張っていたのではないだろうか。そしてそれらは彼らがこれからどう生きていくかに関わってくることだと思うのだ。全体学習を通して私も生徒たちも差別解消に向けて、人間としてどう生きていくのかを考え、話し合い、学んでいった。彼らも私もこれからだと思う。ひとつの言葉を生きた言葉として命を与えるか。死んだ言葉にしてしまうか。これからの生き方、行動のいかんによるのだと思う。過去を振り返り、また周りを眺めて、反省し、感嘆し、なげき、文句を言うだけでは物事は前進していかない。あらゆるものから、あらゆる機会から学び、自分が自分の意志で、自分の足で前へ一歩踏み出さねば自分の生命は輝かない。生徒たちも、私も、これからだと思う。人間としての生命の根をより深く、広くはっていけるかどうか。これからの生き方、行動のいかんによるのだと3年間の全体学習を終えて今更のように思うのだ。

※

もうすぐ卒業することになる。私は矛盾のない人間になりたい。そして毎日一步一步正しい道を歩んでいく人生を送りたい。私はきれいごとなんか言わない。自分に嘘をつかない人間になろうと、強く思った。

(3年最後の全体学習の後の生徒感想)

